

おひさま通信

～ゆたかに生きる松幸さん～

ー 白岡太陽の家 にじ ー

松幸さんとの出会い

横山松幸さん（43歳）とみぬまとの出会いは、養護学校高等部卒業後、ホームや知人宅で暮らし、いくつかの作業所や施設を経っていた頃のことになります。川口太陽の家、その後太陽の里に入所しました。そして本人の希望により2008年2月からサンライズ（グループホーム）での暮らしが始まりました。日中は白岡太陽の家にじで働いています。

出会った頃の松幸さんは「なめんやよ」と常に神経が張り詰めているような様子がありました。複雑な家



庭環境により家庭は安心出来る居場所ではなくなり、そのことから父らに粗暴な行為をはたらき、ますます居場所を失っていった過去がありました。そんな中で出会い、友人となつた人とは良くも悪くも強い連帯感を抱いて生きてきたからか、横の繋がりの意識が強く、自分に向けられたことだけではなく、他の仲間に対する職員の対応についても同様に憤りを溢れさせる姿がありました。「それっておかしい？」と。

そんな松幸さんなのですが、何か気に入らないことがあると里を無断で抜け出し、居なくなり、結局困ると里に連絡してきて、迎えにきた職員と里に戻ることは続いていました。戻ってくればいつも通りの様子でしたが、太陽の里は、嫌な場所ではなかったものの、居たい場所にはなっていないように思います。

私たちは、里が松幸さんにとって居たい場所になってほしいと思いました。

松幸さんの変化

ある日、松幸さんの変化につながる出来事がありました。口も達者で、大抵のことは自分でやれてしまう松幸さんが、掃除が仕事の時に限って、いつも以上にふてくされた態度を取り、周りに悪態をつき、その場の雰囲気悪くしていました。当初は、「また松幸さんのいつものやつが出たよ」くらいな感覚で受け止め、話を聞いては宥めることを繰り返して、気持ちを持ち上げておしまいにするという関わりで済ませていました。

そんな日々が続いていたある日、「掃除の仕方がわからない」と言ってくるには、気づいて発信してくれる人です。しかし自分が困っているという事は言葉には出来ていなかったのです。言ってくれたことに対して、丁寧に伝え伝えていったあたりから、職員を頼っていい存在だと思ってくれたようです。松幸さんが言うには「仲良くなった」と。

それまでは、「俺の気持ちなんか分かっちゃいない！」とくすぶっていて「だから出ていく！」という行動に走っていましたが、「出ていく」という言葉や行動の裏側にある想いを一緒に紐解いていくことで、「出ていく！」という言葉が、「ホーム

響き

サンライズ

*サンライズでは仲間の夏期休暇期間の余暇活動として行きたい場所、やりたい事など希望をとり、としまえんのプール、カラオケ、バーベキュー、かき氷、すいか割り企画し余暇活動を行いました。天候には恵まれずプールも冷たかったのですが、波のプールやウォータースライダーなどを楽しみ仲間一人ひとりが充実した夏を過ごすことができました。

白岡市障害者デイサービスセンター

*今年初めての試みで夏の暑さを乗り切ろうと8月10日に暑気払いのレクリエーションをしました。大声大会では好きな人の前で「好きだー」と叫んだり、特に意味はなく「バカヤロー」と叫んだり。ストッキングをかぶつての綱引き大会では笑い声と歓声が止みませんでした。その他、風船パレーやスポーツ吹き矢など、各種目で熱戦が繰り広げられ、皆が元気に笑顔で過ごせた一日となりました。

川口太陽の家

*夏といえばボーナスの季節、川口太陽でも、夏休み前日の8月12日に各班にて賞与の支給が行われ

で暮らしたい」に変わっていったのは、明らかな変化でした。

願いを実現させるために

職員はその思いや願いを形にしたと考えました。松幸さんは度重なるてんかん発作で不安定な歩行となり運動機能の障害も進行していた為、職員の数が多い暮らしでないと無理だと、私たちは勝手に諦めていたのかもしれない。もしかしたら松幸さん自身も諦めていたのかもしれない。でも職員は、初めて松幸さんが口にしてくれた想いや願いを是非形にしたいと思い、「発作があるから暮らしせない」ではなく、「発作があっても暮らしせる」ためには何が必要で何を大切にするかの視点を取り入れた自活訓練に取り掛かりました。

度重なる発作で怪我を負い、松幸さん不安から気持ち折れそうなどきはありました。しかし、「やめる」とは一度も言いませんでした。その諦めない想いに、職員がけん引されました。

計画通りにはいかないこともありましたが、一つひとつ一緒に解決し、私たちと同じ思いを持ち、宿泊実習などから協力してくれたサンライズへの入居の夢を叶えることが出来ました。せっかく叶えた暮らしなのですが、今でも不満を口にすることはありません。年一回くらいの無断外出もあつたようです。ただ不満の内容を聞いてみると、今の暮らしが嫌だ、辞めたいというものではなく、現状への不満です。もっとよくしたいよくなりたいたいという前向きな気持ちがあるが故に出てくる感情です。

願いを理解し寄り添う

松幸さんにとっては、衣食住が保障されれば、ゆたかになれるわけではなく、そこが本人にとって居たい場所になれるかどうかが大切でした。寄り添うという言葉、私たちはよく使います。職員はずっと寄り添ってきたと思います。でも受け入れてはもらえていませんでした。大切なのはどうか寄り添うか、そしてそれは



松幸さんの想いや願いを明らかにしなければわからないことでした。集団で議論をする中でそれらを具体化し、松幸さんとともに乗り越えたことで、現在の松幸さんがいます。

この先も、発作で体が思うようにならないことは続きます。歳を重ねていく中で、思いと体が一致しなくて苦しい時期も来ると思います。それでも、松幸さんが願う限り、今の暮らしを継続していくための原点は仲間の想いや願いに依拠することなのだと思えます。

白岡太陽の家にじ施設長 高橋 守

大宮太陽の家

*8月10日、大宮太陽の家では夏祭りを行いました。ふらわー班の仲間が会場準備を、くろーばー班の仲間が食事の準備をして、美味しい焼きそばにかき氷、ボウリングや魚釣りを楽しんだりしました。年度の前半を頑張った仲間たちにはメダルも贈呈され、記念撮影も行いました。

オレンヂホーム

*お盆休みに仲間と職員15名で湯沢に行きました。今回は2泊3日なので、2日目をフルに遊べます。長岡まで往復電車に乗って日本海のお寿司を食べる班、水上の体験工房でキャンドルを作る班、町内のプールで遊ぶ班にわかれしました。十分に満喫して夜は「へぎそば」です。天気にも恵まれて楽しい3日間でした。